

昔むかし、あるところに、イワンという王子がいました。イワン王子には妹が三人ありました。親たちは、イワン王子に「こいい残して亡くなりました」。

「妹たちを妻にほしいという者が来たら、たとえだれであつても、最初に来た人と結婚させなさい」

あるとき、イワン王子は、妹たちと連れだつて、庭を散歩していました。すると、突然、空一面に黒雲が広がつて、激しい雨が降つてきました。

「さあ、帰ろう」と、イワン王子はさけびました。

みんなが部屋に入つたかと思うと、雷がとどろいて天井が真つ二つに裂けました。そして、その裂け目から、鷹が一羽舞いこんで来ました。鷹は、床に身を打ちつけると、りっぱな若者の姿になりました。

「こんにちは、イワン王子。いつぞやはお客としてうかがいましたが、今日は結婚の申しこみにやつて来ました。あなたの上の妹さんを妻にほしいのです」

イワン王子は、

「妹さえよければ、わたしは引き止めません。幸せを祈ります」と答えました。

妹が承知したので、鷹はイワン王子の妹を自分の国に連れていきました。

月日の経つのは早いもので、一年が夢のように過ぎ去りました。

あるとき、イワン王子は、ふたりの妹と連れだつて、庭を散歩していました。突然、空一面に黒雲が広がつて、激しい雨が降つてきました。

「さあ、帰ろう」

みんなが部屋に入つたかと思うと、雷がとどろいて天井が真つ二つに裂けました。その裂け目から、鷺が一羽舞いこんで来て、床に身を打ちつけると、りっぱな若者の姿になりました。

「こんにちは、イワン王子。いつぞやはお客としてうかがいましたが、今日は結婚の申しこみにやつて来ました。あなたの真ん中の妹さんを妻にほしいのです」

「妹さえよければ、わたしは引き止めません。幸せを祈ります」

妹が承知したので、鷺はイワン王子の妹を自分の国に連れていきました。

それからまた一年が過ぎました。

あるとき、イワン王子は、妹とふたりで、庭を散歩していました。突然、空一面に黒雲が広がつて、激しい雨が降つてきました。

「さあ、帰ろう」

ふたりが部屋に入ったかと思うと、雷がとどろいて天井が真つ二つに裂けました。その裂け目から、からすが一羽舞いこんで来て、床に身を打ちつけると、りっぱな若者の姿になりました。

「こんにちは、イワン王子。いつぞやはお客としてうかがいましたが、今日は結婚の申しこみにやってきました。あなたの末の妹さんを妻にしたいのです」

「妹さえよければ、わたしは引き止めません。幸せを祈ります」

妹が承知したので、からすはイワン王子の妹を自分の国に連れていきました。

イワン王子は、ひとりぼっちになりました。

一年たつと、イワン王子は寂しくなつて、妹たちに会いに行こうと考えました。王子は旅立ちました。

ずんずん歩いて行くと、広い野原に出ました。そこに、おおぜいの兵士が倒れていました。イワン王子は、

「だれか生きている者がいたら、教えてくれ。こんな大軍を打ち負かしたのはだれなんだ」とさけびました。すると、生き残つたひとりの兵士が答えました。

「うるわしの王女マリアだ」

イワン王子は、先へ進んで行きました。すると、りっぱな白い天幕テントの前に出ました。中から、うるわしの王女マリアが歩み出て、

「これからどちらへ行くのですか。旅は好きなの。それともいやいやながらなさっているの」とたずねました。イワン王子は答えました。

「勇士ゆうしは、いやいやながら旅はしないものです」

「では、お急ぎでなかったら、わたしの天幕にお立ち寄りください」

イワン王子は喜んで王女マリアの天幕に入つて、泊まりとました。ふたりは夫婦になつて、王女マリアの国に行き、王女の城で暮らしはじめました。

しばらくすると、王女マリアは、また戦争に行きたくなりました。そこで、イワン王子に国のことをまかせてから、こういいました。

「この城のどへいらしてもけっこう、何をらんご覧になつてもかまいません。ただ、物置だけは、のぞいてはいけませんよ」

王女マリアが出かけてしまうと、イワン王子はすぐに物置にかけつけて、戸を開けてのぞきみました。そこには、不死身ふじみのコシチェイが、十二本のくさにぐるぐる巻かれてぶらさがっていました。コシチェイは、イワン王子にいいました。

「わしを哀れと思つて水を飲ませてくれ。わしは、ここで十年のあいだ、飲まず食わずで苦しむつづけているのだ」

イワン王子は、桶に一杯水をくんでやりました。コシチェイは、ぐっと飲みほして、

「桶一杯じゃ、のどの渇きはおさまらん。もつとくれ」といいました。イワン王子は、二杯目の水をさし出しました。コシチェイは、それも飲みほすと、もう一杯せがみました。そして、三杯目を飲みほしたとき、昔の力を取りもどしました。コシチェイは、体をぶるんとふつて、十二本のくさをいっぺんに引きちぎりました。

「ありがとうよ、イワン王子。だが、おまえは、もう二度と王女マリアを見ることはできない。自分の耳が見えないようにな」

そういうと、不死身のコシチェイは、竜巻となつて窓から飛び出して行きました。そして、王女マリアに追いつくと、王女をさらつて自分のすみかに連れて行つてしまいました。イワン王子は、天を仰いで泣きました。そして、

「どんなことがあろうとも、きつとマリアを探し出す」といつて、旅に出ました。

一日歩き、二日歩き、三日目の明けがたになつて、すばらしい宮殿が見えました。宮殿のわきに、櫟の木が立っていて、りっぱな鷹がとまっていました。鷹は、櫟の木から舞い降りると、地面に身を打ちつけて、若者の姿になりました。そして、

「これはなつかしい。兄さんお元気ですか」とさげびました。妹も飛び出して来て、大喜びで迎えました。

イワン王子は、妹夫婦の所に三日間泊まつてから、いいました。

「いつまでもここに居るわけにはいかない。妻を探しているのだ。うるわしの王女マリアを」
鷹はいいました。

「あのかたはなかなか見つかりませんよ。何かあつたときのために、あなたの銀のスプーンをここに置いて行つてください。スプーンをながめながら、兄さんのことを思つていきましょう」

イワン王子は、銀のスプーンを残して、旅を続けました。

一日歩き、二日歩き、三日目の明けがたになつて、前よりもつとすばらしい宮殿が見えました。宮殿のわきの櫟の木に、りっぱな鷲がとまっていました。鷲は、地面に舞い降りて、身を打ちつけると、若者の姿になりました。そして、

「妻よ、来てごらん。兄さんが見えだよ」とさげびました。妹が飛び出して来て、大喜びで迎えました。

イワン王子は、妹夫婦の所に三日間泊まつて、いいました。

「いつまでもここにいるわけにはいかない。妻を探しているのだ。うるわしの王女マリアを」
驚はいました。

「あのかたはなかなか見つかりませんよ。あなたの銀のフォークをここに置いて行ってください。フォークをながめながら、兄さんのことを思ってくださいよう」

イワン王子は、銀のフォークを残して、旅を続けました。

一日歩き、二日歩き、三日目の明けがたになって、前のふたつよりもっとすばらしい宮殿が見えました。宮殿のわきの櫟の木に、りっぱなからすがとまっていました。からすは、地面に舞い降りて、身を打ちつけると、若者の姿になりました。

「妻よ、来てごらん。兄さんがお見えだよ」

妹が飛び出して来て、大喜びで迎えました。

イワン王子は、妹夫婦の所に三日間泊まって、いました。

「いつまでもここにいるわけにはいかない。妻を探しているのだ。うるわしの王女マリアを」
からすはいました。

「あのかたはなかなか見つかりませんよ。あなたの銀のたばこ入れをここに置いて行ってください。たばこ入れをながめながら、兄さんのことを思ってくださいよう」

イワン王子は、銀のたばこ入れを残して、旅を続けました。

一日歩き、二日歩き、三日目になって、ようやく、不死身のコシチェイのすみかにたどり着きました。コシチェイは、狩りに出かけていて、王女マリアがひとりでいました。王女は、イワン王子に抱きついて、涙を流していました。

「あなたは、なぜ、わたしのいいつけにそむいたのです。なぜあの物置をのぞいて、不死身のコシチェイを逃がしてしまったの」

「許してくれ、マリア。さあ、コシチェイの戻らぬうちに、いっしょに逃げよう」

ふたりは急いで逃げだしました。

不死身のコシチェイは、狩りからの帰り、家に向かっているところでした。いきなり、乗っている駿馬しゅんめがけつまずきました。

「えい、このやくざ馬め。どうしてつまずいたりするのだ。何か悪い虫の知らせか」

コシチェイがいうと、馬が答えました。

「イワン王子がやって来て、王女マリアを連れ去りました」

「どうだ、追いつけるだろうか」

「大丈夫です。小麦をまいて穂ほの出るまで待ち、刈り取って脱穀だつこくし、粉こなに引いてパンを五窯かま焼き、

そのパンを平ら^{たい}げてから追いかけたって、じゅうぶんに間に合うでしょう」

コシチェイは、馬をとばしてイワン王子に追いつきました。

「わしに水を飲ませてくれた親切に免^{めん}じておまえを許してやろう。二度目も許すが、三度目は気をつけろ。一寸き^{いっすん}ざみに切りきざんでしまうからな」

コシチェイは、そういうと、王女マリアを奪^{うば}って行つてしまいました。

イワン王子は、石に腰かけて泣きました。思いきり泣いてから、次の日、王女マリアを取りもどしに行きました。行つてみると、コシチェイは、留守でした。

「逃げ出そう、マリア」

「でも、また追いつかれるわ」

「追いつかれたつていい。たとえ少しの間でもいつしよにいられるんだから」

ふたりは逃げ出しました。

不死身のコシチェイは、家に向かっているところでした。いきなり、乗っている駿馬がけつまずきました。

「えい、このやくぎ馬め。どうしてつまずいたりするのだ。何か悪い虫の知らせか」

「イワン王子がやつて来て、王女マリアを連れ去りました」

「どうだ、追いつけるだろうか」

「大丈夫です。大麦をまいて穂の出るまで待ち、刈り取つて脱穀し、ビールを仕込み、酔っぱらうまで飲んでぐっすり眠り、それから追いかけたって、じゅうぶんに間に合うでしょう」

コシチェイは、馬をとばしてイワン王子に追いつきました。

「おまえにいつておいたじゃないか。王女マリアにはもう会えない、自分の耳が見えないようにとな」

イワン王子はひとりぼっちになつて、思い切り泣くと、次の日、王女マリアを取り戻しに行きました。またもや、コシチェイは、留守でした。

「逃げ出そう、マリア」

「でも、また追いつかれて、今度はあなたは一寸きざみに切りきざまれてしまうわ」

「追いつかれたつていい。君がいないと、ぼくは生きていけない」

ふたりは逃げ出しました。

不死身のコシチェイは、家に向かっているところでした。いきなり、乗っている駿馬がけつまずきました。

「えい、このやくぎ馬め。どうしてつまずいたりするのだ。何か悪い虫の知らせか」

「イワン王子がやって来て、王女マリアを連れ去りました」

コシチェイは、馬をとばして追いかけました。そして、追いつくと、イワン王子を一寸きざみに切りきざんで、たるにつめ、たるを鉄のたがで何重にも締めて、海の中に投げこんでしまいました。それから、王女マリアを連れてすみかに戻りました。

ちようどそのころ、妹たちの宮殿では、銀のスプーンと銀のフォークと、銀のたばこ入れが黒くくもりました。

「これはきつとよくないことが起きたにちがいない」

鷹は、飛んで行つて、海に浮かんでいるたるを見つけ、岸に引き上げました。鷲は、命の水を取りに行き、からすは、死の水を取つてきました。

三羽の鳥は、たるをこわして、細切れになったイワン王子の体をもとの姿に並べました。からすが、死の水を振りかけると、王子の体はひとつにつながりました。鷲が命の水を振りかけると、イワン王子はぶるつと身震いして立ち上がつていいました。

「ああ、ずいぶんよく寝たなあ」

イワン王子は、コシチェイのすみかに行つて、王女マリアにいいました。

「コシチェイが帰つてきたら、聞きだしてくれ。あんな駿馬をどこで手に入れたのか」それから、急いでものかげに隠れました。

やがて、不死身のコシチェイが帰つて来ました。王女マリアはたずねました。

「あなたは、どこであの馬を手に入れたの」

コシチェイは答えました。

「山越え谷越え、この世の果て。火の川のむこうに、ヤガーばあさんが住んでいる。ばあさんは、すばらしい馬をうんと持っているんだ。わしは、三日間、馬たちの番をして、一頭もなくさなかつた。そのほうびに、一頭もらつたのさ」

「でも、火の川はどうやって渡つたの」

「わしはまほうのハンカチを持つているんだ。これを右に三べん振ると高い高い橋ができて、火も届かないのさ。左に二べん振ると、橋は細く細くなつてしまう」

つぎの朝、コシチェイが出かけてしまうと、王女マリアは、コシチェイのハンカチを取つて来て、イワン王子に渡しました。

イワン王子は、さつそく、ヤガーばあさんの家へ向かいました。山越え谷越え、火の川を渡り、飲まず食わずで何日も歩いて行きました。とちゅうで、渡り鳥の群れに会いました。イワン王子が、

「ひな鳥を一羽つかまえて食べるとしよう」というと、親鳥がいました。

「食べないでください。そうすれば、いつかあなたのお役に立ちましょう」

イワン王子は、がっかりして、先へ進んで行きました。すると、子連れの雌^{めす}ライオンに会いました。

「ライオンの子を食べるとしよう」と、イワン王子がいうと、雌ライオンがいました。

「食べないでください。そうすれば、いつかあなたのお役に立ちましょう」

イワン王子は、さらに進んで行きました。すると、森の中でミツバチの巣を見つけました。

「蜜^{みつ}を少しいただこう」と、イワン王子がいうと、女王バチがいました。

「蜜を食べないでください。そうすれば、いつかあなたのお役に立ちましょう」

イワン王子は、お腹を空かせて、よろよろしながら先へ歩いて行きました。

ようやく、ヤガーばあさんの家にたどり着きました。その家は十二本の杭^{くわ}で囲まれていて、そのうちの十一本に、人間の首がひとつずつ突きさしてありました。

「こんにちは。ヤガーばあさん」

「やあ、イワン王子。何の用かね。自分から進んで来たのかい。それとも仕方なしに来たのかい」

「こゝで働いて、雄々^{おおお}しい馬を一頭もらいたくて来たんです」

「いいとも、イワン王子。三日のあいだ、無事に馬たちの番をつとめたら、雄々しい馬をくれてやる。だがもし一頭でもなくしたら、おまえの首をあ最後の杭につきさしてやるからな」

ヤガーばあさんは、イワン王子に食べ物と飲み物をやってから、さっそく仕事にかからせました。イワン王子は馬たちを野原に連れ出しました。そのたん、馬たちは、散り散りになってかき出していつて、一頭残らずいなくなってしまうました。イワン王子は、石に腰かけて泣きました。そのうちに、うとうとと眠つてしまいました。太陽がしずみかけたとき、渡り鳥がイワン王子を起こしました。

「起きてください、イワン王子。馬たちは、もう家に戻っていますよ」

イワン王子が帰ってみると、馬たちは一頭残らず馬小屋にいました。

その晩、ヤガーばあさんは、帰つてくると、馬たちをどなりつけていいました。

「どうして家に戻つて来たんだ」

馬たちはいいました。

「これが戻らずにいられましょうか。鳥たちが四方八方から飛んできて、目玉をほじくろうとしたんですよ」

「それなら、あしたは、野原へなど行くな。深い森の中に散らばるんだ」

あくる朝、イワン王子は、馬たちを野原に連れ出しました。ところが、馬たちは、散り散りになって、深い森の中へかけて行ってしまうました。イワン王子は、石に腰かけて泣いているうちに、うとうとと眠ってしまいました。太陽が森のむこうにせずむと、ライオンがイワン王子を起こしました。

「起きてください、イワン王子。馬たちは、もう家に戻っていますよ」

イワン王子が帰ってみると、馬たちは一頭残らず馬小屋にいました。

ヤガーばあさんは、帰ってくると、馬たちをどなりつけました。

「どうして家に戻って来たんだ」

「これが戻らずにいられましょうか。ライオンが四方八方からとび出してきて、あやうく八つ裂きにされるところでしたよ」

「それなら、あしたは、海の中に飛びこむんだ」

あくる朝、イワン王子は、馬たちを野原に連れ出しました。ところが、馬たちは、散り散りになってかけ出していつて、海の中に飛びこむと、首まで水につかっってしまうました。イワン王子は、石に腰かけて泣いているうちに、うとうとと眠ってしまいました。太陽が森のむこうにせずむと、ミツバチが、イワン王子を起こしました。

「起きてください、イワン王子。馬たちは、もう家に戻っていますよ」それから、ミツバチはいいました。「あなたは、帰ったら、馬小屋の飼^かい葉^はおけのかげに隠れていなさい。馬小屋には、ひよろひよろの子馬が一頭、ふんにまみれてごろごろしています。真夜中になったら、その子馬を盗んで逃げ出します」

イワン王子は、帰ってくると、馬小屋にしのびこみ、飼い葉おけのかげに隠れました。

そこへ、ヤガーばあさんが入ってきて、ものすごいけんまくで、馬たちをどなりつけました。

「どうして家に戻って来たんだ」

「これが戻らずにいられましょうか。ハチどもが、四方八方から、数限りなくおそいかかってくるさしまくったんです」

真夜中になると、イワン王子は、ひよろひよろの子馬を盗んで鞍^{くら}を置き、火の川めざして逃げだしました。川岸に着いて、コシチェイのハンカチを右に三べん振ると、高い橋ができました。橋を渡り切って、ハンカチを左に二べん振ると、橋は、細く細くなりました。

あくる朝、ヤガーばあさんが目を覚まして馬小屋に行くと、ひよろひよろの子馬がいなくなっていました。ヤガーばあさんは、あわてて後を追いかけてきました。白^{うす}に乗り、杵^{きね}でこぎ、ほうきで後を消しながらまっしぐらに駆^かけていきました。火の川に着くと、そこに橋がかかっていたので、

「こいつはおあつらえ向きだわい」といつて、渡り始めました。ちょうど真ん中まで来たとき、橋がぼきっと折れました。ヤガーばあさんは、火の川に落ちて、死んでしまいました。

イワン王子は、緑の野原まで来ると、小馬に草を食べさせました。ひよろひよろの子馬は、たちまち、すばらしい駿馬になりました。

イワン王子は、馬を飛ばして、コシチェイのすみかに行きました。

「さあ、逃げだそう、マリア」

「でも、コシチェイが追いついてきたら、あなたはまた切りきざまれてしまうわ」

「いや、もう追いつけないさ。この馬は、すばらしい駿馬なんだ。鳥のように飛んで行くよ」
ふたりは逃げだしました。

不死身のコシチェイは、家に向かっているところでした。いきなり、乗っている駿馬がけつまずきました。

「えい、このやくざ馬め。どうしてつまずいたりするのだ。何か悪い虫の知らせか」

「イワン王子がやって来て、王女マリアを連れ去りました」

「どうだ、追いつけるだろうか」

「さあ、どうだか。今度は、わたしよりすばらしい馬がついていますから」

「がまんがならん。追いかけよう」

どれだけ走ったことでしょう。不死身のコシチェイは、イワン王子に追いつくと、さっと地面にとび下りて、切りかかってきました。そのとき、イワン王子の馬が、力いっぱいコシチェイをけりました。コシチェイは、頭が割れて死んでしまいました。

こうして、イワン王子と王女マリアは、国に帰っていきました。とちゅうで、妹たちの宮殿に立ち寄りしました。からすも鷲も鷹も、大喜びでした。

「おやまあ、兄さん。あなたにまた会えるとは思ってもいませんでしたよ」

ふたりは、国に帰りつくと、みんなから温かく迎えられ、いつまでも幸せに暮らしましたとき。
おしまい

村上郁再話

資料『ロシア民話集上』中村喜和著／岩波書店